

「満州」に建てられた忠霊塔

横山 篤夫

はじめに

1. 日本の忠霊塔建設と満州の忠霊塔
2. 納骨祠から誕生した前期忠霊塔
3. 日本の忠霊塔のモデル

おわりに

キーワード：満州、忠霊塔、南満州納骨祠
保存会、満州忠霊顕彰会、
大日本忠霊顕彰会

はじめに

首相の靖国参拝をめぐる、偏狭なナショナリズムの台頭が懸念される昨今である。その際、靖国神社からA級戦犯を分祀するか、新たな戦没者追悼施設を作るか、A級戦犯を合祀したままの靖国神社でいいのかということが戦没者追悼の論点の核心であるかのようにマスコミは報じている。

このような皮相な靖国論に対して、戦争と平和の問題という根源的視角から、靖国神社史論

を提起した赤澤史朗『靖国神社』（岩波書店、2005年）は、戦没者追悼の在り方を考える上で欠かせない貴重な歴史学の一書であると考えられる⁽¹⁾。

ただし同書は、戦没者追悼を靖国神社という舞台に限定して検討しているが、戦没者追悼施設はそれ以外にも多岐にわたって存在している。それらは以下の三類型にまとめられる⁽²⁾。①戦没者の「霊魂」の存在を前提に、それを祠殿に祀って慰霊する靖国神社や各地の護国神社等。②戦没者の遺骨等を埋葬する陸軍墓地や海軍墓地、巨大な記念碑的性格も持つ納骨施設の忠霊塔等の墳墓。③戦没者への慰霊、顕彰の思いを伝えるために各地に建設された招魂碑、忠魂碑等の記念碑。

この三類型は、相互に関連し合い影響し合いながら、近代日本の戦没者の追悼の役割を果たしてきた。この全体的な構造の中で、靖国神社を位置づけた上で議論することが戦没者追悼を考える上で必要であると思う。この内特に②については従来余り研究されてこなかったが、最近急速に調査、研究が進んでいる⁽³⁾。

筆者は旧真田山陸軍墓地の調査からいくつか

(1) 多くの書評がその意義を論じているが、例えば島藺進の『日本史研究』（2006年7月号）書評では「熱気を帯びる複雑な時事問題について貴重な一石を投じた」と評している。

(2) 大原康男『国立慰霊施設の新施設構想に反対する』（小泉首相の靖国神社参拝を支持する国民の会、2001年）3ページ。大原氏はこの三類型を別個のものとするが、筆者はいくつかの実態を調査し、相互

に補充し合っていると考える。

(3) 『国立歴史民俗博物館研究報告』（第102集、2003年3月）、小田康徳・横山篤夫・堀田暁生・西川寿勝編著『陸軍墓地がかたる日本の戦争』（ミネルヴァ書房、2006年4月）など。共同研究をふまえ、歴史学だけでなく他分野の研究者や関心ある市民の研究なども発表されている。

の論考をまとめてきた⁽⁴⁾が、現在陸軍墓地の最終形態として建設されようとした忠霊塔に注目している⁽⁵⁾。そこで本稿では、日本での忠霊塔建設のモデルとなった「満州」(中国の東北一帯の俗称、日本が植民地経営の対象としようとしたときに使用されたこともあり、現在中国では使用されない。本稿では当時の歴史的用語として使用し、煩瑣を避けるため以下「」は省略する)の忠霊塔の建設状況を分析し、そこから何が言えるかを考えてみたい。

1. 日本の忠霊塔建設と満州の忠霊塔

忠霊塔とは、市町村や戦地に建設された納骨施設を伴った巨大な建造物である⁽⁶⁾。合葬された墳墓であるが、記念碑的性格と戦没者の靈魂を信じる人には身近に設けられた祀殿的存在としても扱われた。

満州事変後、地域で自然発生的に建設された忠霊塔もあり、日中戦争の激化で戦死者が増加

すると、その慰霊・顕彰のための忠霊塔等碑表建設の要望が民間に広がった⁽⁷⁾。これを総力戦を戦い抜く精神的動員に活用しようと組織した運動が出現した⁽⁸⁾。日中全面戦争開戦2年目の1939年(昭和14)7月7日に発足した、財団法人大日本忠霊顕彰会⁽⁹⁾(以下「顕彰会」と略記)が展開した忠霊塔建設運動であった。

ただしこの忠霊塔建設運動には、靖国神社・護国神社を戦没者慰霊の中心施設と位置づけようとする神道界・内務省からは戦没者慰霊の神社祭祀を混乱させるとの危惧の声があがった⁽¹⁰⁾。一方、現実には中国で戦死者が増加している陸軍と、戦没者慰霊から疎外される不安を持っていた仏教界は遺骨を収納する忠霊塔建設運動に積極的に参加した⁽¹¹⁾。

1939年1月18日、内務省神社局、同警保局、陸軍省、海軍省、厚生省、文部省の関係者が集まり、対立を回避し調整するための会議を開いた⁽¹²⁾。この結果、「忠魂碑表忠塔等ノ記念碑又ハ戦没者ノ遺骨ヲ納ムル所謂忠霊塔等ノ建設ニ

(4) 旧真田山陸軍墓地のテーマに関連して発表した拙稿を、発表順に記しておきたい。

①「旧真田山陸軍墓地に建立された野田村遺族会の墓碑169基について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集、1999年3月

②「真田山陸軍墓地の成立と展開について」『地方史研究』第281号、1999年10月

③「真田山陸軍墓地と女学生」拙著『戦時下の社会』岩田書院、2001年3月所収

④「旧真田山陸軍墓地の祭祀担当団体の成立に就いて」『大阪民衆史研究』第50号、2001年12月

⑤「旧真田山陸軍墓地変遷史」『国立歴史民俗博物館研究報告』第102集、2003年3月

⑥「旧真田山陸軍墓地被葬者遺族からの聞き取り」同前

⑦「大阪府内の高槻と信太山の陸軍墓地」同前、森下徹氏との共同稿

⑧「真田山陸軍墓地納骨堂建設をめぐる」『ヒストリア』第186号、2003年9月

⑨「真田山陸軍墓地と大阪」『戦争責任研究』第45号、2004年9月

⑩「陸軍墓地と一般墓地内の軍人墓」『多摩のあゆみ』第117号、2005年2月

⑪「軍隊と兵士——さまざまな死の姿」共著『陸軍墓地がかたる日本の戦争』ミネルヴァ書房、2006年4月

⑫「地域の陸軍墓地を通して靖国を考える——赤澤史朗「靖国神社」をめぐる——」『歴史科学』第187号、2007年2月

⑬「大阪の忠霊塔建設」『戦争と平和』第16号、2007年3月

⑭「研究ノート『満州』の忠霊塔と大阪の忠霊塔建設」『大阪民衆史研究』2007年2月、第60号

(5) 拙稿「大阪の忠霊塔建設」大阪国際平和研究所紀要『戦争と平和』第16号、2007年3月

(6) 拙筆「忠霊塔」福田アジオ・新谷尚紀他編『日本民俗大辞典』下、吉川弘文館、2000年4月

(7) 例えば『関西大学学報』161号(1938年7月)には、同窓生の戦没者の分骨を合葬する関西大学忠霊塔の建設の呼びかけがあり、1939年11月に完成している。

(8) 大原康男「続・忠魂碑の研究」『國學院大學日本文化研究所紀要』第52輯、1983年9月、97ページ

(9) 『大阪朝日新聞』1939年7月8日

(10) 大原康男前掲論文、84—86ページ

(11) 同前91ページ

付テハ何レカー方ニ止メ、市町村ヲ単位トシ
(郡府県ノ区域ヲ単位トスルモノハ認メサルコ
ト)一基ト致様^{いたすよう}⁽¹³⁾として、府県を単位として
建設が進められる護国神社と、市町村を単位に
戦没者遺骨の追悼納骨施設忠霊塔の棲み分けを
明示した。

その上で成立した顕彰会の会長には、前関東
軍司令官であった後備役陸軍大将菱刈隆が就
任、名誉会長に平沼騏一郎首相以下、政官民軍
の大物が並び、地方の支部長には各府県知事が
委嘱される規定になっていて準政府機関のよう
な組織であった⁽¹⁴⁾。

しかし忠霊塔建設運動が大々的に進められ
ると、戦没者追悼施設の中核に靖国神社・護国神
社を置こうとする内務省・神社界側との対立
は、現実にはトラブルを惹き起こした⁽¹⁵⁾。

1939年11月4日、神社界と顕彰会幹部の懇
談により次の点で合意し決着がはかられた⁽¹⁶⁾。

- (1) 忠霊塔は支那事変において名誉の戦
病死をなせる英霊の遺骨を納むるものであ
り、即ち墓であり、墳墓であって、これが
管理は市町村に於てなす事とするので即ち
公営墳墓と称す可きものである。
- (2) 忠霊塔への参拝様式は参拝者の自由
であり、一宗一派を超越したるものとする。
- (3) 忠霊塔に対し市町村等が行ふ公の祭
祀様式については尚研究中。

これ以後、戦没者追悼の施設として「英霊奉
斎」は靖国神社・護国神社が、墳墓としては市
町村毎の「忠霊顕彰」を担う忠霊塔の二系統が
明確に分担することになった。

1941年7月19日、陸軍省は陸軍墓地規則を
改正し、忠霊塔を陸軍墓地に併合して建設する
ことを可能にする規定を加えた。そのため、全
国の陸軍墓地には忠霊塔が建設される見込みで
あった。こうして、国内では陸軍墓地に建設さ
れたものも含め、1942年8月現在までに150基
の忠霊塔が完成⁽¹⁷⁾し、建設中・計画中のものは
1500基もあったという⁽¹⁸⁾。

しかし計画中の忠霊塔の多くは実現しなかつ
た。アジア太平洋戦争の戦況が日本軍にとって
不利になると、戦没者追悼より直接戦力を増強
するキャンペーンの方が優先された。新聞の紙
面では忠霊塔建設のための献金よりも、軍用機
献納の募金の記事が目につくようになった。そ
の転機は1942年10月中・下旬頃であった⁽¹⁹⁾。

そのためすべての市町村に巨大な1基の忠霊
塔が建設され、戦没者追悼の市町村における中
心施設になるはずであった⁽²⁰⁾忠霊塔の歴史や
実態については、従来余り注目されてこなかつ
た。全国展開が実現はしなかったとは言え、目
ざしていた内容を検討することは戦没者追悼の
問題を考える上で必要であろう。

その際、忠霊塔の研究で先鞭をつけた大原康
男の「満州における忠霊顕彰会——忠霊塔を祭
祀施設として扱っていた——の実績を踏まえ
て、それを内地にそのまま導入・拡大すること
を目ざしていた」と顕彰会の方針を評価し、
1939年11月以後「大きな軌道修正を余儀なく
された」という指摘⁽²¹⁾があることに留意しなが
ら、日本の忠霊塔建設のモデルとされた満州の
忠霊塔を検討してみる。

(12) 同前73ページ

(13) 昭和14年2月20日警保局発、警保局長神社局長
通牒「支那事変ニ関スル碑表建設ノ件」(各地方長官
宛)

(14) 大原康男前掲論文、76ページ

(15) 例えば和歌山県では護国神社と忠霊塔の建設地の
奪い合いが発生した(『和歌山市史』第3巻、1990
年、652ページ)。

(16) 大原康男前掲論文、88ページ

(17) 菱刈隆述『忠霊塔物語』童話春秋社、1942年10
月、180ページ

(18) 大原康男前掲論文、97ページ

(19) 前掲拙稿「大阪の忠霊塔建設」、10ページ

(20) 前掲『忠霊塔物語』、146ページ

(21) 大原康男前掲論文、89ページ

2. 納骨祠から誕生した前期忠霊塔

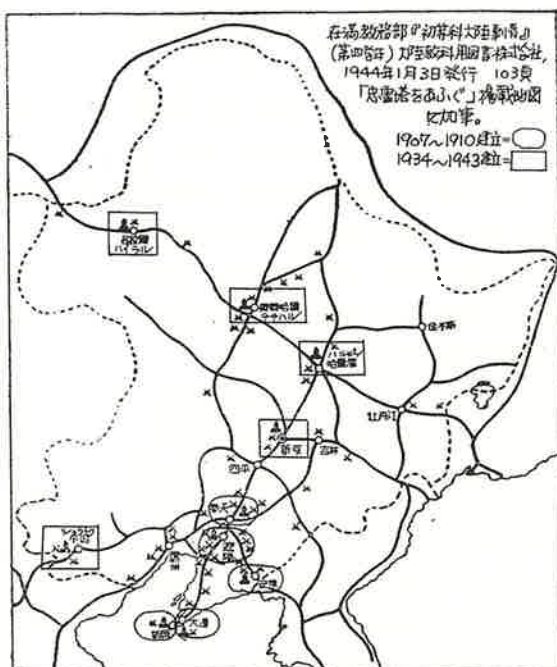
満州に建設された忠霊塔は、管理者によって二つに分けられる⁽²²⁾。第一は日本側所管とされるもので、数は10基と少ないが巨大な忠霊塔である。第二は「満州国民生部」所管で、1932年に日本によって作りあげられた傀儡国家が日本側の作った忠霊塔を模して各地に建てたものであり、正確な数は把握されていないが相当数作られた。ただし規模は日本側所管のような巨大なものではなかった。日本の顕彰会がモデルにしようとしたのは第一の忠霊塔であったので、以下本稿ではこれを指して「満州の忠霊塔」と

表記する。また日本の租借地であった関東州に建設された忠霊塔も、本稿では一括して満州の忠霊塔に含めて扱う⁽²³⁾。地名は当時の表記で示して検討する。

なお本稿で取り上げる10基は、旅順、大連、遼陽、奉天、安東、新京、^{ハルビン}ハル濱、^{チチハル}齊々哈爾、承德、^{ハイラル}海拉爾⁽²⁴⁾の忠霊塔である。その所在地を示したものが図1であり、建設順に概要をまとめたものが表1である。

表1の被葬者数を見て分かる通り、10基の内前期の5基までの旅順、大連、遼陽、奉天、安東の忠霊塔は日露戦争後に日露戦争の戦没者の遺骨を納めるために、後期の5基は満州事変と日中戦争の同時進行中の戦没者の遺骨を納める

図1
満州の忠霊塔
(○と□で
囲んで表示)



(22) 満州国史編纂刊行会編『満州国史』各論、財団法人満蒙同胞援護会、1971年1月、1, 117ページ

(23) 満州の日本人学校の補助教材『満州補充読本』4の巻(在満日本教育会教科書編輯部、1940年12月、58-80ページ)には「忠霊塔巡り」として、関東州と「満州国」の忠霊塔を一括して取り上げている。当時の満州の日本人社会が一括して見ていたことを示していると言えよう。なお『満州補充読本』の存在は、吉岡敦子氏からご教示を得た。

(24) 前掲『忠霊塔物語』74ページには、10基目の忠

霊塔は牡丹江に建てられたとしている。しかし同書77ページの忠霊塔一覧表には承德忠霊塔までは設立年月日と納骨数を挙げているが牡丹江は記述していない。大原康男前掲論文も牡丹江を含めて10基としているが、筆者は牡丹江は予定で実際は海拉爾に建設されたものと考え、満州で使われた在満教務部『初等科大陸事情』(第4学年、1944年3月)103ページ掲載地図には海拉爾に忠霊塔の表示があり、1971年に発行された前掲『満州国史』でも海拉爾を10基目としている。

「満州」に建てられた忠霊塔

表1 満州の忠霊塔

時期	忠霊塔名	建設年月 改築年月 ＜納骨祠＞	被葬者数（人） 日露戦争 シベリア出兵他 満州事変			塔高	備 考
前期 忠 霊 塔	旅順	＜1908. 3＞ 表忠塔 1909.11	24,466	1	116	65.4 m	表忠塔は乃木、東郷両大 将が発起 塔は現存 白玉山頂に屹立
	大連	1908. 9 1925.11	6,029	53	6,082	28.5 m	市内中心部の中央公園 丘陵上端に屹立
	遼陽	1905. 8 着工 1938.10 (完工は不明)	14,364		510	45 m (改 築 前 13.5 m)	市街に近い高燥な大き な広場に移築
	奉天	1910. 3 ＜日露戦争後すく＞ 1925. 9	34,875	13	840	24.3 m	奉天城内の千代田広場 にあったものを市街の 中心部に移す。対露を意 識して北面して立つ
	安東	1910. 6	3,129		300	不明 (図2⑤の写 真で見ると 数m程度)	安東市街の背後、鎮江山 の中腹に立つ 8万坪の満鉄公園内
後期 忠 霊 塔	新京	1934.11		18	1,088	35 m	新京を一望する立地 満州国皇帝が参拝 勤労奉仕4.5万人 総工費25万円
	ハルビン 哈爾濱	1936. 9	15	108	3,289	67 m	北満州の中心都市ハル 濱の大地に屹立 将兵だけでなく満鉄社 員などの犠牲者も合祀 総工費20万円 日満官民の募金で立つ
	チチハル 齊々哈爾	1936. 9	11	10	962	36 m	齊々哈爾市の南郊に聳 え立つ 総工費19万円 地元、全国から募金 勤労奉仕3.5万人
	承德	1938. 5			2,566	不明	不詳
	ハイラル 海拉爾	1943.12以前 (1943.12印刷の 教科書に忠霊塔 の記載あり)				不明	不詳

注（１）菱刈隆述『忠霊塔物語』（童話春秋社、1942.10）の記述から作成

（２）一部は『満州忠霊記』、『満州補充読本』『初等科大陸事情』、『満州国史 各論』で補充、訂正

ために建設されたものである。

近代日本が経験した初の本格的対外戦争は日清戦争であった。日清戦争の戦没者の遺骨は、一旦遼東半島等の戦場に埋葬した。しかし日本軍が撤退すると、これを暴く現地の中国人の動きがあった。そのため陸軍当局は、日本軍人の遺骨を残らず回収してひとまとめにして内地に還送した。京都の泉湧寺に仮安置した後、7個の大箱に納めて在郷軍人等がリレーしながら四輪荷車を押して東海道を二か月かけて搬送した。そして東京の護国寺に新設された多宝塔に収納された。これが日本の忠霊塔の元祖ともいふべきものであったという⁽²⁵⁾。この祭祀は、現在も護国寺によって継続されている⁽²⁶⁾。

以上の経過により、満州の忠霊塔には日清戦争の戦没者の遺骨は入っていない。

日露戦争の戦没者は、戦地で火葬してその分骨を内地に帰還させることとした⁽²⁷⁾。その際「若干残ル所ノ残灰ヲ納ムル所⁽²⁸⁾」として設置されたのが満州の納骨場であり、これが満州の忠霊塔の起源とされている。日清戦争後の経験から、戦地にそのまま埋葬するのを避けたのであろう。集骨し納骨する施設が建造された。

従って前期の5基は日露戦争後、主戦場跡地の南満州に集骨・納骨のために作られた「納骨祠」が主たる施設であった。表2に納骨祠と塔の建設順の関係を一覧にした。納骨祠の屋根がドーム状の安東を除き、他の4基の前期忠霊塔では納骨祠が先に着工されている(表2)。これに対して5基の後期忠霊塔は、いずれも納骨施設と塔は一体のものとして建設されている。

顕彰会は「今日では、全満州を通じて、都合十基の大忠霊塔を仰ぐことになった⁽²⁹⁾」と同一のものとして述べているが、満州に建てられた忠霊塔の前期と後期とでは建設のコンセプトが異なっていた。また建設の進め方や維持管理についても前期と後期の忠霊塔では違っていた。

満州の日本軍人戦没者名を記載し忠霊塔の沿革を述べた奉天忠霊塔の神職佐々木常磐は、『満州忠霊記』で次のように記述していた。

日露戦争に際し満州の各地に於ける忠死者は約八万にして、其霊灰遺骨は関東軍に於いて保存し(後之を保存会に移す)永久の祭祀を行ふ事となり、納骨の祠を白玉山、大連、遼陽、奉天、安東に建て、概ね所縁の地を区域とし之に霊灰遺骨の一部を集纏して奉安せり。

日露戦争後、関東軍によって⁽³⁰⁾戦没者遺骨の残灰収納事業が進められ、1923年(大正12)には南満州納骨祠保存会(以下「保存会」と略記)が組織され、維持経営を担当した⁽³¹⁾。その名称から納骨祠の保存のための組織であることは明らかである。ただし保存会とは言っても独自の会ではなかった。会の事務所は関東軍司令部内にあり、会長は関東軍参謀長(1932年以後は参謀副長)、役員は関東軍と満鉄から出ていた。経費は保存会及び軍事費で支弁され、各納骨祠の建造物は陸軍省所管国有財産であった⁽³²⁾。

つまり後には塔と合わせて忠霊塔と呼ばれたが、後期忠霊塔が有名になるまでは前期忠霊塔の5基は納骨祠と呼ばれ、関東軍が建設し満鉄

(25) 前掲『忠霊塔物語』の「内地の忠霊塔」。

(26) 護国寺『音羽陸軍埋骨地英霊之塔』、1996年11月、47ページ

(27) 「戦場掃除及戦死者埋葬規則」、1904年5月30日

(28) 1907年11月14日経建第3767号「納骨規定」第一条。この規定は坂井久能氏のご教示を得た。

(29) 前掲『忠霊塔物語』、74ページ

(30) 同前71ページでは関東都督府が担当したと述べ

るが、名ざされた関東都督付後身の関東局編・発行の『関東局施政30年史』(1936年10月)225ページには「神社でなく、一の公の祭祀を為す施設として納骨祠がある(中略)初め関東軍管理の下に祭祀、保存に力められた」と記述している。

(31) 佐々木常磐「満州納骨祠」『満州忠霊記』、南満州納骨保存会、1934年8月

(32) 同前

表2 前期忠霊塔の納骨祠と塔の建設

忠霊塔	旅順	大連	遼陽	奉天	安東	維持・管理団体
西暦	納骨祠 塔	納骨祠 塔	納骨祠 塔	納骨祠 塔		
1900	05 ● 07 ×		05 ● 07 ×	05 ● 10 ×		05 関東軍 ⁽³⁾
1910	08 ● 09 ×	08 ● ?	08 ● 以後(カ) ×	? ● ×	●	
1920		25 ● 改築		25 ● 移築		23 南満州納骨祠保存会 ⁽⁴⁾ 33 後期忠霊塔建設のため満州忠霊顕彰会設立 ⁽⁵⁾
1930			37 ● 38 ● 移築			35 保存会が満州忠霊顕彰会に含まれる ⁽⁶⁾
1940						42 満州忠霊顕彰会が大日本忠霊顕彰会に含まれる ⁽⁷⁾
1945						

注(1) ●—●は納骨祠施設着工—完工年を示す。×—×は塔施設の着工—完工年を示す。

(2) ●は忠霊塔に納骨施設が含まれることを示す。

(3) 『関東局施政三十年史』(関東局編・発行、1936) 225 ページ、『満州国史』各論(満蒙同胞援護会、1971) 1117 ページによる。菱刈隆述『忠霊塔物語』(童話春秋社、1942) 71 ページには関東都督府が中心となって納骨場を建設したと記述している。

(4) 佐々木常磐『満州忠霊記』の「満州納骨祠」には、南満州納骨祠保存会は関東軍司令部内に置かれ、会長は関東軍参謀長(1932 以後は参謀副長)、役員は軍の高級副官、満鉄から出ていたと記述。

(5) 上掲『満州国史』各論 1117 ページ。

(6) 上掲『関東局施政三十年史』225 ページ。

(7) 辻子実『侵略神社』(新幹社、2003) 228 ページ。

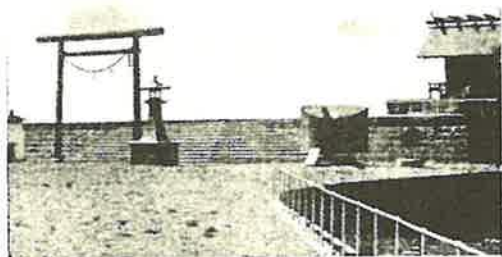
等の協力を得て一括して管理運営していたのである。

同時に納骨祠前には靖国神社型の鳥居や燈籠が備えられ、一種の神社的扱いを受けていた(図2)。満州事変の直前の1931 年春に、満州の納骨祠を巡拝した靖国神社宮司賀茂百樹は次の様に記している⁽³³⁾。

先人流血の聖地に永く伝ふべき堂々たる建

築を以て、莊嚴四辺を圧して屹立する満州五ヶ所の納骨祠は即ち吾が靖国神社の奥宮とも奥津城とも云ふべく(中略)その厳然と整理せられ積重ねて竝安せられたる納骨箱の前に額突いては感極まって悚然たり靖国神社や護国神社では、遺骨は穢れているとして一切受け付けず、天皇のために戦死したと軍が認めた軍人の霊のみを「英霊」とし、名

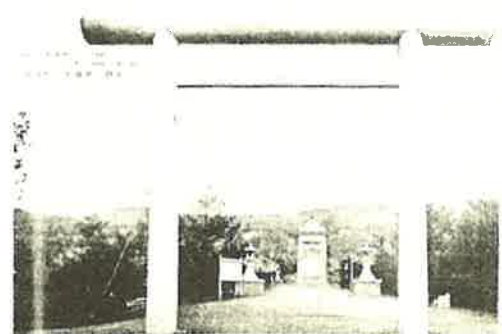
(33) 小山田茂喜蔵『満州忠霊塔』、房総乃木講社、1935



①旅順の納骨祠



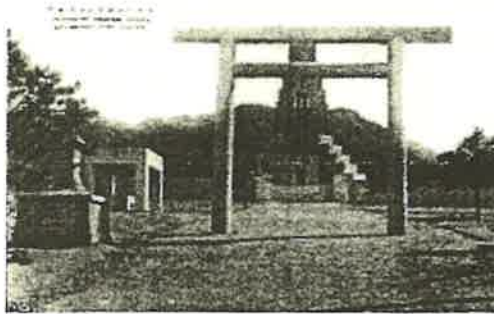
③遼陽（移築前）



⑤安東



①旅順納骨祠前での軍の参拝（納骨祠と鳥居の間に仮屋を建てている）



②大連（改築後）



④奉天（移築後）

図2 満州の前期忠霊塔（納骨祠）

①、②、⑤は絵葉書写真

③は小山田茂喜蔵『満州忠霊塔』（房総乃木講社、1935年）口絵写真

④は辻子実『侵略神社』（新幹社、2003年9月）120ページ掲載写真

図3 納骨祠と祭祀 （絵葉書写真、辻子実『侵略神社』所収）

②遼陽納骨祠内部の写真
（壁に沿って遺骨箱が積み上げてあり、中央には神道風祭壇がある）



簿に氏名を記載して神として祀ってきた。しかし遺骨を納めた満州の納骨祠を、1931年には靖国神社の宮司が靖国神社より奥に位置する神社と認めたのである。合葬墳墓と慰霊の祠殿が、満州の納骨祠では一体のものとして扱われたことを示している（図3）。

なお前期忠霊塔の中で抜きん出て巨大な塔として屹立していたのが旅順の白玉山頂の表忠塔であった（表1、図4）。1930年の旅行案内書⁽³⁴⁾には、「白玉山納骨祠と表忠塔」という見出しの中で次の様に説明している。

（白玉山の――引用者補足）頂上は瓢形をなし、北の膨らみには南面して、日露役我が陸海の犠牲となりし、忠勇二万二百余の遺骨を納めた納骨祠が建ち、南方の膨らみには、円錐形218尺に及ぶ表忠塔がある。この表忠塔は、乃木、東郷両將軍の発起により建設されたもので、日本人の築造した営造物中、規模の宏大と設計と偉観に於いて、古今に稀である（以下略）

後に顕彰会は「この表忠塔と納骨祠と、都合二つの堂塔を合わせて、ここに真の意味の忠霊塔が成立ってる」と説明した⁽³⁵⁾が、旅行案内書では以前は納骨祠と表忠塔は関連はするが独自の施設として認識されていたことを示している。この表忠塔は日露戦争の激戦地と日露戦争の犠牲者を忘れないという全満州の記念碑の性格を持っていたのであろう。しかし建設された位置から、次第に納骨祠と一対で認識され、その影響で遼陽や奉天の納骨祠が移・改築される時、次第に塔が高く大きくなったものと思われる。

つまり満州の5基の前期忠霊塔は、あくまでも日露戦争後の戦没者残骨納骨祠が主であり、併せて慰霊の祀殿として遇されていた。さらに後には記念碑の性格も持つようになっていった



図4 白玉山表忠塔（絵葉書写真）

と言えるであろう。

3. 日本の忠霊塔のモデル

1931年9月18日、関東軍は自ら起こした柳条湖での満鉄爆破事件を口実に、全満州を占領した。これに抵抗する中国軍、農民、学生らを日本では「匪賊」と呼び、その鎮圧のための日本軍は満州各地で空爆を含む軍事行動を展開した。この戦争を日本では満州事変と呼び、宣戦布告をした「正規の戦争ではない騒乱」として扱おうとした。しかし中国の抗日戦争はゲリラ戦化・長期化し、日本軍の戦没者は1万人をこえた。この戦没者の遺体は火葬され、その「大部分を内地の家庭に送り其一部を分かって納骨祠に納むる⁽³⁶⁾」ものとされた。

(34) 南満州鉄道株式会社『旅順』、1930年。この史料は栗津賢太氏のご教示による。

(35) 前掲『忠霊塔物語』、121ページ

しかし満州事変の戦没者は満州全域にわたった戦闘で亡くなっており、「忠死者の地域は北満の全部と南満辺境の各地に跨り、現在の納骨祠のみにては忠勇流血の現場を遠く隔たるの感あるものあり⁽³⁷⁾」と従来の南満州の日露戦争の主戦場に建てられた納骨祠だけでは対応しきれないことが指摘された。

そのため従来の納骨祠を維持管理してきた保存会とは別に1933年11月、新たに新京、哈爾濱、齊々哈爾、承德（さらに後には海拉爾）に新たに納骨祠を建てるための満州忠霊顕彰会（以下本稿では日本で1939年に設立された顕彰会と識別するため、満州での忠霊顕彰会は略記せずに「満州忠霊顕彰会」と表記する）が設立された⁽³⁸⁾。

会の名称を納骨祠の保存会ではなく、「忠霊顕彰会」としたのは、進行中の満州事変の戦没者の遺骨分骨を納骨するだけでなく「忠霊」として「顕彰」とするという目的を強く意識した結果からであろう。こうして満州忠霊顕彰会の指導の下に全満州を網羅する納骨祠が新京、哈爾濱、齊々哈爾、承德（後海拉爾も）に新たに建設された⁽³⁹⁾。ここには初めから「忠霊顕彰」のための巨大な記念塔を備えており、ここから「忠霊塔」の呼称が一般化したものと筆者は考える（図5）。

これが5基の後期忠霊塔である。そして遡って、以前に建設されていた納骨祠と5基の塔も一般に忠霊塔（本稿では「前期忠霊塔」と表記した）と呼ばれるようになったものだろう。しかし満州忠霊顕彰会が成立しても、以前からの保存会は存続していた。保存会が満州忠霊顕彰会に吸収されるのは、1935年4月のことで、以来「一層祭祀及び保存の目的に専念してゐる」と記録されている⁽⁴⁰⁾。

図5 満州の後期忠霊塔

はじめてから塔と納骨祠が一体に設計され塔には『忠霊塔』とのみ刻まれている。

出典

①『侵略神社』120

ページ掲載写真

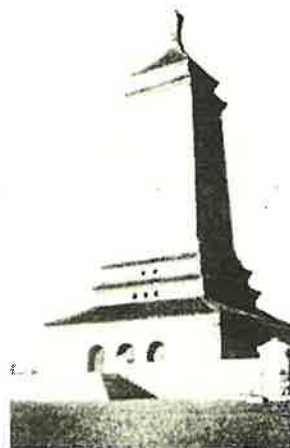
②『初等科大陸事

情』第4学年96ペー

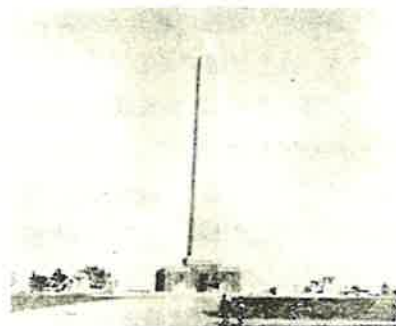
ジ掲載写真

③『忠霊塔物語』72

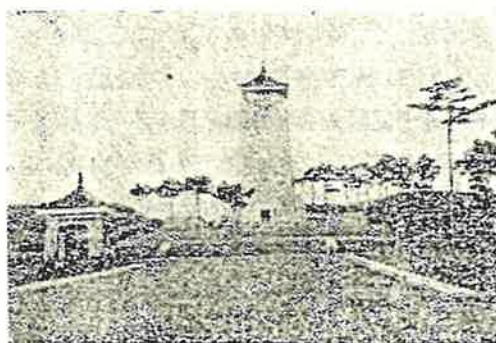
ページ掲載写真



①新京忠霊塔 塔高は35m。



②哈爾濱忠霊塔 塔高は67m。



③承德忠霊塔 塔高は不明。

(36) 前掲「満州納骨祠」『忠霊塔物語』

(37) 同前

(38) 同前

(39) 同前

ところで後期忠霊塔の建設にあたって、満州忠霊顕彰会は従来の関東軍丸抱えの建設維持の方法を採らなかった。先ず建設にあたって建築様式を公募し、同時に建設維持基金として250万円を募金によって賄う方針⁽⁴⁰⁾が立てられ、その方向で実行された。

この方針で最初の忠霊塔が建設されたのは、「満州国」の首都とされた新京（現長春）においてであった。新京忠霊塔建設にあたり、その中心人物の一人が当時の関東軍司令官菱刈隆であった。少し長い引用になるが、その体験を述べた菱刈隆の文章⁽⁴²⁾を紹介する。

「新京の忠霊塔」の所在地は、恰も同市の中央部にあって、北安路と康平街との角に当り^{ざんぜん}嶄然として碧空に聳え立ち、実に雄大な姿を示してゐます。こゝには、もとの関東軍司令官武藤信義元帥以下1,173柱の忠霊が厳かにお祀りしてあります。この塔は、昭和9年5月15日に工事を起し、約半ヶ年を経て、同年11月15日に首尾滞りなく竣工を告げました。序ながらこれが建設総工費は、約25万円程を要しました。（中略）この忠霊塔の建設に当って、前後実に4万5千人といふ夥しい人々の、熱誠溢るるばかりの勤労奉仕をうけましたことで、（中略）永久に忘れることの出来ない、深い深い追憶となっています。

建設設計から建設維持費、さらに敷地整備の勤労奉仕へと、地域の人々を参加させ、参加した人々に「自分達の忠霊塔」という意識を持たせる新方式の忠霊塔建設事業であった。そしてこの体験を、「永久に忘れることの出来ない深い深い追憶となつ」たと述べた菱刈隆こそ、1939年に東京で顕彰会を設立した時の会長で

あった。戦没者追悼の新たな運動を、日中戦争の戦時体制に国民を動員する一環に位置づけようとする時、満州の前期忠霊塔ではなく後期忠霊塔建設の体験がその基調となったのではなかろうか。

宗教社会学の立場から栗津賢太は「忠霊塔は植民地都市計画に組み込まれたものであり（中略）植民地の現実が、逆に内地の戦没者追悼記念施設の解釈に大きな影響を与えた」と指摘⁽⁴³⁾するが、傾聴すべき見解と言えよう。

その後、日本内地で顕彰会の運動が陸軍の強い支持の下に発展すると、植民地満州の忠霊塔建設運動を吸収した。1942年、満州忠霊塔顕彰会は内地で発足した顕彰会に「発展改称」したと記されている⁽⁴⁴⁾。

満州の後期忠霊塔は、進行している満州事変・日中戦争の戦没者の遺骨収納と慰霊祠殿と巨大な記念塔が一体のものとして建設された。主要な会戦地の近くを選び、全満州を網羅して配置し、地域の日本人を動員しながら忠霊塔を建設した点で、前期忠霊塔とは異なる面を持っていた。内地の顕彰会の忠霊塔建設運動は、満州の後期忠霊塔とその建設運動をモデルにしていたと言って良いであろう。

おわりに

満州忠霊顕彰会の路線を内地に導入しようとした顕彰会の運動は、1939年11月の合意によって慰霊祠殿としての役割は外ずされることになった。その点で大原康男の「大きな軌道修正を余儀なくされた」とする見解は、日本社会での忠霊塔の性格を考える上で重要な指摘であると思う。

(40) 前掲『関東局施政30年史』、225ページ

(41) 前掲「満州納骨祠」『忠霊塔物語』

(42) 前掲『忠霊塔物語』、74ページ

(43) 栗津賢太「忠霊塔と植民地経営」（国立歴史民俗

博物館共同研究「戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究」研究会での報告、2006年9月9日）

(44) 辻子実『侵略神社——靖国思想を考えるために

ただし1939年11月4日の関係者の合意、規定通りには忠霊塔建設は進まなかった。民衆を動員し、仏教界が参加協力する中で実態としては多様な慰霊祭祀を伴っていた。もっとも、戦局が厳しくなり、顕彰会が想定したよりは遙かに少数の忠霊しか完成せず、しかもそこでの戦没者追悼の行事等の実際は必ずしも十分明らかにされていない。しかし一部の事例からではあるが、「英霊奉斎」と「忠霊顕彰」とは明確に分離されているとは限らなかった⁽⁴⁵⁾。

顕彰会の想定通りに各市町村に巨大な1基の忠霊塔が建設されたとすると、靖国神社の戦没者追悼に占める比重は相当変わった可能性がある。もっともその場合は、地域の人々の戦没者追悼の想いは、市町村に1基ずつ設置された忠霊塔に強く組織された可能性とセットとしてであると考えられるが。

満州の忠霊塔について、現在の中国ではどのように評価しているかの一例として、1991年8月に遼寧人民出版社から発行された『日本侵占旅大四十年史』の該当部分の日本語訳⁽⁴⁶⁾を引用する。

日本侵略・占領期の旅順・大連の宗教

(一) 神道

“九・一八”事変後、日本当局はさらに神道の活動を利用して侵略戦争に服務させた。(中略)各地に“忠霊塔”を建てて“慰霊大会”を挙行し“招魂祭”等で日本軍の士気を激励し、軍人とその家族を慰めた。(中略)神道は侵略戦争と密接に関わりながら在住日本人の精神を結集させ、侵略し拡張するという国策を支持し、その進行に重要な働きを及ぼした。

忠霊塔を日本神道の一部分と位置づけ、在住日本人を侵略戦争に動員する上で重要な役割を果たしたと評価している。

こうした評価は、後期忠霊塔が中国人を敵として戦い、戦没した日本軍人の納骨施設・慰霊祠殿・祈念碑を一体として建設した忠霊塔の建設状況・祭祀や参拝する日本人達を見てつけられたものであろう。その際、管理運営団体が一本化された前期忠霊塔も、組織され動員された日本人参拝団等の存在から、後期忠霊塔と同一視されたのであろう。

日本の敗戦後、こうした中国人の視線に囲まれていた満州の忠霊塔の其の後については、殆ど記録されていない。僅かに全般的に見た次の記述がある⁽⁴⁷⁾。

忠霊塔の処理については、在外公館からの照会に対し、吉田外務大臣より「現地において適宜処理されたし」との返事があった。各地の忠霊塔はおおむねソ連軍の進入とともに管理者の手により保管名簿等を焼却処分に付したが、遺骨に対するソ連兵の暴行が少なくなかった。瀋陽では、国民政府の好意により近郊に日本軍戦死の墓地を作り、ここに遺骨を移納した。しかし地方の忠霊塔は、神社の境内とともに荒廃されるに任せた。

戦後の日本人の引き揚げ記の中には、「(忠霊塔は——引用者補足)戦後すぐに中国人の手で壊されたという⁽⁴⁸⁾」等の伝聞が記されているものもあるが、1基毎の詳しい状況は不明である。

2006年5月、国立歴史民俗博物館の基幹共同研究「戦争体験の記録と語りに関する資料論的

——』、新幹社、2003年9月、228ページ

(45) 現在各地の忠霊塔の建設事情が解明され始めているが、その中から祭祀の一部も報告されている。群馬県の今井昭彦氏、牛島仁氏、海老根功氏、埼玉県の栗津賢太氏、神奈川県坂井久能氏、石川県の本

康宏史氏、高知市の小幡尚氏等の研究があり、大阪府については(5)の拙稿がとりあげている。

(46) 顧明義他編、朴錦玉・龚琴琴訳

(47) 前掲『満州国史』総論、1970年6月、807ページ

(48) 新田光子『大連神社——ある海外神社の社会史

研究」の中国東北調査旅行に筆者は参加する機会を得た。旅順、大連、瀋陽（旧奉天）の忠霊塔跡を尋ねた。

納骨祠と表忠塔の分かれていた旅順の忠霊塔は、納骨祠は無くなっていたが、表忠塔は「白玉塔」として現存し聳え立っていた⁽⁴⁹⁾。大連の忠霊塔は破壊されて無くなっているが、基壇と忠霊塔への公園内の整備された道路はそのまま使われていた。基壇の上には巨大なサッカーボールのモニュメントが、スポーツの盛んな大連のシンボルとして聳えていた。瀋陽の忠霊塔跡地にはビルが建てられていて痕跡を全く留めていなかった。

——』、おうふう、1997年3月、178ページ

(49) 2006年5月現在では、旅順の街区の一部は未だ日本人の立ち入りが禁止されているため、直接納骨祠跡を見ることはできなかった。白玉塔を臨む道路で中国人ガイドの説明による。

